

成鶏へのIBワクチン追加接種による格外卵の低減

合同会社KPSC家畜診療所
金田 正彦

新型コロナウイルス感染症による影響で観光・飲食業が苦しい状況に置かれているとの報道が毎日のようになされています。そこで消費されていた食材を供給しているところにも当然のことですが、影響が出ています。養鶏場さんに訪問すれば、話題は「売り」の話ばかりです。生産サイドにはコスト削減圧力が非常に高まり、どのワクチンを中止できるか、やめても問題の無い添加剤は何かという話題が増えてきています。不要なものを削ることはもちろん大切ですが、そればかりに目を向けず、「売れない卵」を減らすことが収益改善に役立ちます。「売れない卵」の代表である「格外卵」を減らすために、多くの養鶏場が取り組みを進めています。集卵設備の適正化、卵殻強化資材の活用など、ハード(鶏舎・GP)からソフト(鶏)まで様々な部分を点検し、「売れる卵」の生産に努力されています。今回、農場の流行にあったIBワクチンを成鶏で追加接種したところ、格外卵が低減できた事例について紹介します。

その農場様では、400日齢過ぎになると「ザラ卵」や「ピンブル卵」といった卵殻の異常が多くなり、群全体の格外率は10%後半に上昇していました。卵殻質の改善のため、卵殻強化資材を使用してみたものの思うような効果は得られていませんでした。巡回時に400日齢過ぎの死亡鶏を解剖してみると卵墜・腹膜炎に加えて、腎臓の腫れが目につき、一部には尿石症や全身の尿酸塩沈着症を起こしている個体が見受けられました。ただ、死亡鶏の腎臓を検査に出してもIBウイルスは検出されませんでした。尿酸塩沈着の発生には栄養的な問題以外にIBによる腎臓の障害も関係しているといわれています。IBウイルスは検出されなかったものの、農場のIBの動きを把握するために市販IBワクチン株に対する

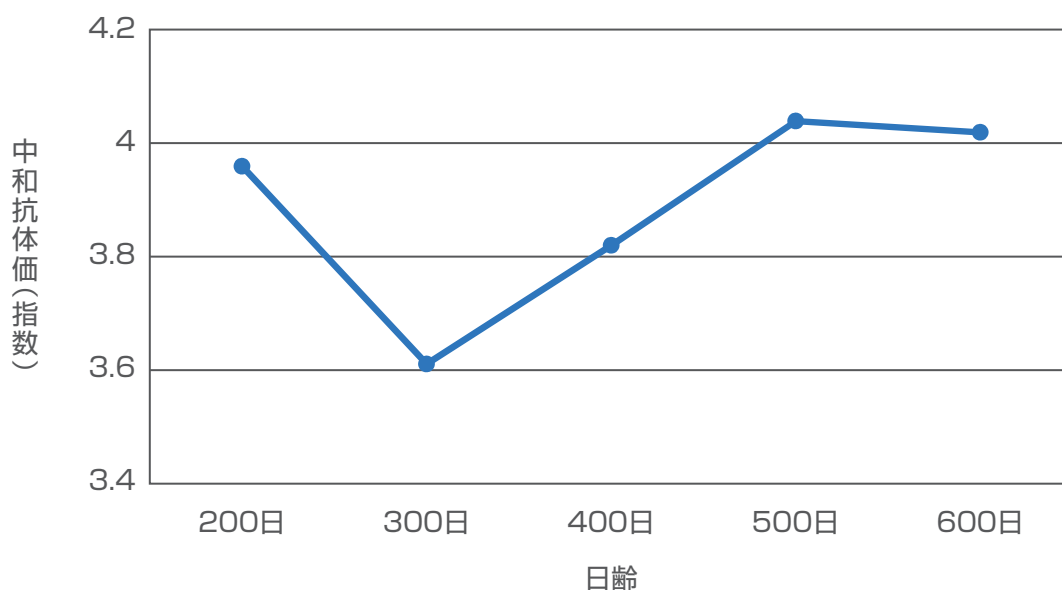


図1. IB-宮崎株に対する中和抗体価の推移

中和抗体検査を実施しました。すると、300日齢から400日齢にかけて宮崎株への反応が高くなる結果が得られました(図1前頁参照)。他の株ではこのような動きを示すものはありませんでした。宮崎株の抗体の動きと卵殻異常の発生が関連していると判断し、農場と相談して、宮崎株の成鶏への追加ワクチン接種を実施することにしました。すると450日齢時の格外率が宮崎株使用前は18%だったのに対し、使用後の鶏群では10%と発生率が大幅に減少しました(図2)。それ以降の鶏群の成績も見ていますが、概ね10%前後で推移し、10%後半の格外率は見られなくなりました。鶏舎を歩いていても以前ならすぐに見つけられた「ザラ卵」などの異常卵が見つけにくくなりました。また斃死鶏における尿石症や尿酸塩沈着の発生も解剖時には見かけなくなってきました。

IBワクチンの成鶏への追加接種は今回のようにうまくいくこともあれば、うまくいかないこともあります。農場にあったIBワクチンを選択しないと効果は薄れてしまうでしょうし、せっかく接種したのにやり方の問題で実際には鶏に接種できていなかったということもあります。また、IBワクチンによるリアクションにも注意が必要です。実際IBの追加接種を行っている農場の生産成績をみると、接種後1~2週で産卵率が低下したり、減耗羽数が一時的に増加したりするところもあります(もちろん問題ないところもあります)。追加接種は、必ずかかりつけの獣医師の指導の下、判断・実施してください。IBは卵殻だけでなく、内部卵質にも影響することが知られています。IBコントロールが卵質改善につながるかもしれませんが、ただし、IBで引き起こされる問題は多岐にわたるため、生産現場では何か問題が起きればIBのせいだと言われることを良く耳にします。本当にIBが原因なののでしょうか? IBウイルス自体は農場に常在していることが多く、検査技術の発達した現在では、検出される割合が高くなっている感じを受けます。検査結果に振り回されることなく、冷静に、そして農場を理解している方々の意見を聞きながら、原因を探っていただければと思います。

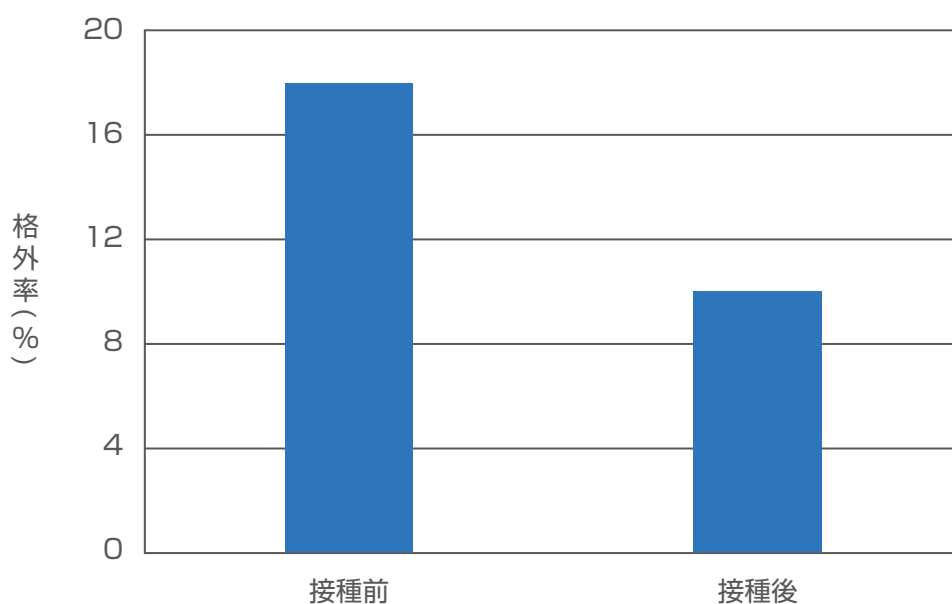


図2. 450日齢における格外率